

お茶がいたただけるような

茶掛 佐藤正憲

昭和十四年夏、中野越南先生に従って嵐山のあたりを歩いた。ある人の別荘らしいしゃれた邸に門額がかかっている横に「撫松」とある。「いかがですか。」と伺うと、先生もじっと見据えられた。「おもしろい、なかなか書けない。」とおっしゃって、そのまま歩かれる。一時間くらい歩いたあと、立ちどまっておっしゃったのである。「あのゆきかたで、床にかけるものを書いたらどうだろう。………さわがしい。」さっきの額についてであった。

額の筆者は魯山人であった。これより数年前、山人が書のことについていろいろ発言しているのを知り、山人主宰の星ヶ岡茶寮で集りに、私も出席し、山人の傍若無人たる書を直接聴聞し、初心者の方は一種痛快の思いを味わったことがある。額を見て、そのこ

とを憶い出していた。山人の書に対する世評は、当時であつては、今日以上の賛否が対立していた。専門家であつては否が、好事家にあつては賛が多数を占めた。先生が初め「なかなか書けない」と言われたとき、専門家としての先生が、魯山人の書を高く評価されたのだと聞いたのだが、再び口にされたのを聞いて、先生にとって問題は魯山人ではなく、ご自身の書なんだと気がついた。

あの「撫松」。味がある。だがあの調子で幅を書いた場合、それが床に掛った部屋はどうなるだろう。さわがしくはないか。主客の心はやわらぐであろうか。掛物ひとりでおしやべりをして、………このような思考が続いて、あのことばになつたものようである。外にさらされる門の額と、床に掛けられる書を、同じ構えて筆を執ることを前提にし

て、魯山人を評されたものでは、もちろんない。批評家の立場で発言されたのではなく、ご自分の問題を問題とされているのであつた。そして書を志すという若い私を同行者として、私にそうおっしゃつたのである。

この年の夏は格別暑かつた。私が先生のお宅を訪れたのは、これがはじめてであつた。

三日間、京都に滞在して毎日お目にかかつた。嵐山を散歩した前日は朝から夕方までお宅で書の話の伺つた。その中から一つ。条幅を書いて知人に与えたところ、表具ができて箱書を頼まれた。とにかく書いて届けた帰り路、ある家の表に、「……警防団本部」という看板が出ていた。一目で素人の筆とわかるが、まことによく乗っている。おめずおくせずやつている。うまいまいを論ずれば決してうまいものではない。だが、ちゃんとおさまつている。今届けてきた箱書、この看板のようについているであろうか。長いこと手習いをしてきた。自分なりに苦勞もしてきた。だがそれでよい書を書けるといふわけのものではない。書のむずかしいところはそこで、あらためて考えさせられたのである。看板や表札を書くのは職人のすること、などと高くまつている人もあるが、看板だつて、表

札だつて容易に書けるものでない。与えられた条件を克服して、自由に自分のものが書けるようになる、それが学書が目標なら、看板であれ、表札であれ、それこそ真剣勝負というもの。こうおっしゃって、床の間の掛物ということに及んだのであった。「部屋がちゃんとおさまるような書を書きたいものですね。」先生はこう結ばれるのであった。

嵐山で額を見たとき、先生の頭の中には床の間に掛ける書幅の問題がすわり込んでいたのである。

もう八十に手の届くOさんは、趣味で日本画を描く。小僧さんからたたき上げた菓子屋さんだが、家業は息子さんに譲って今は悠々の毎日。雨が降らないかぎり、早朝自宅に近い明治神宮の境内を散歩する。自然を觀察し時にスケッチ帖をとり出す。旅も好きで、独り出かける。旅先の海辺や川原で小石を拾う。濡れた石の表面の美しい紋様、Oさんは天然のたくみに心を奪れる。旅がつづくときは、拾った石を自宅に送りつつ次の行程を辿る。だから、ずいぶんたくさんの石が集まっている。一つ一つ、いつ、どこでという記録がついている。Oさんは時々、水を与えて紋様を眺め、写生をする。それを基にしてゆか

たの図案など考えてみたりもする。Oさんにとって貴重な宝である小石の上を、人は容赦なく踏みつけて行く。人がそうするのはあたまえのこと、難ずる気はないが、何だかもうたいたなくて、こんなことを話すこの人との対話はまことにたのしく、時の経つのを忘れてしまふ。もと専門家に南画を学んだ。菓子屋創業に苦勞していた時代で、印ばんで師匠の家に通つた。師は戦前亡くなつたが、その後も独学で今日までつづけている。自分の心にゆとりと潤いを与えてくれた師の恩は忘れぬ。今でも師の墓参をかかさず、遺族ともつきあつて、思い出をかわす。師に対する感謝の気持は失わないが、画の道の歩きかたは變つてきた。写生を基にして製作することをつづけて多年に及ぶからであらう。自分の目で美を求め、発見し、自己工夫の中から描くことがOさんの生きがいのようである。大家の作品に対しても、全く独自の見方をする。異を立てることを狙っているのではない。自分の物差しが出来ているからである。最も嫌うところは「こび」であり、「おもねり」である。今日、こびる心、おもねる心のない作品にはめつたにお目にかかれぬ。書はよくわからないが、やはり「こび」と目につるものが多い。現代高僧墨蹟展というの

をデパートで見てがっかりした、というよくなことで行きつくところは古いものというところになる。古美術の展観はまめに見てある。自分の発見自分の工夫だとうぬぼれていたものを、古人が既にやっていたなど、具体的な話を聞くと教えられるところが多い。このOさんが、ある時、「お茶がいただけるような茶掛を一つ」と申し出られたのには閉口した。自分のことはよく分っているから承諾はしていないが、できたらOさんの納得されるようなもの——Oさんにこびるのでなければ——を書きたいとひそかに思うことである。

茶に使われる古筆歌切は、申すまでもなくもとは巻子か冊子の断簡である。それが茶席の掛物になつているのは後人の所為筆者にはかわりないことである。ところがこうした古筆の断片が、仕立てられて席に掛ると、掛物としての働きを遺憾なく發揮するから妙である。これに反して、はじめから茶掛として書かれたものではなかなかおさまらないというのはどういふわけであらうか。後者の意識はかえつて妨げとなるということであらうか。

病氣一つしたことの無い、元気で○達なOさんではあるが、何分高齢である。私はOさんの期待にこたえることができるであらうか。(四八・一一・一九)